

# L1 談話方略から見た日本人英語学習者の自発発話における母音延伸

横森 大輔<sup>1</sup> 河村 まゆみ<sup>2</sup> 原田 康也<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 京都大学高等教育研究開発推進機構 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

<sup>2</sup> 言語アノテータ

<sup>3</sup> 早稲田大学法学学術院 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-16

E-mail: <sup>1</sup> yokomori.d@gmail.com, <sup>2</sup> kawamuras@pat.hi-ho.ne.jp, <sup>3</sup> harada@waseda.jp

**概要** 日本語を母語とする英語学習者の自発的な発話には「句末の母音延伸 (Phrase-final Vowel Lengthening; PfvL)」とも呼ぶべき現象が観察される。これは、発話チャンクの末尾において、語末の母音が引き伸ばされるというものである。この現象によって、学習者の発話から英語らしいリズムやイントネーションが失われる場合がある。我々は、大学一年生向け授業で行われた応答練習を収録したデータを対象に、PfvLの生起傾向について調査した。本稿では、その生起傾向の調査結果を報告すると共に、日本語の自発発話における談話方略に関する知見を参照しながら、PfvLをもたらす認知的・談話的要因について考察する。

## Phrase-final Vowel Lengthening by Japanese Learners of English — A View from L1 Discourse Strategy —

Daisuke YOKOMORI<sup>1</sup> Mayumi KAWAMURA<sup>2</sup> Yasunari HARADA<sup>3</sup>

<sup>1</sup> Institute for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University

Yoshida Nihonmatsu-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501

<sup>2</sup> Language Annotator

<sup>3</sup> Faculty of Law, Waseda University 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-8050

E-mail: <sup>1</sup> yokomori.d@gmail.com, <sup>2</sup> kawamuras@pat.hi-ho.ne.jp, <sup>3</sup> harada@waseda.jp

**Abstract** Based on the data that we collected in "oral response practices" conducted in freshmen English classes, we observe a phenomenon we call Phrase-final Vowel Lengthening, or PfvL, at the end of words that occur in the course of relatively spontaneous speech by college learners of English in Japan. Based on audio recordings and transcriptions of face-to-face interactions, we investigate the conditions under which such prolongations of word-final vowels may occur in actual learners' speech, more specifically, (1) whether it tends to occur more frequently in reading aloud written texts or in spontaneous utterances and (2) what kinds of word tends be involved in this process and explore possible explanations for these.

### 1. はじめに

#### 1.1. データに基づく学習活動の分析と検証

英語教育の合理的現代化には、学習活動の到達目標である母語話者の言語活動だけでなく、学習者の目標言語の運用状況についてもデータに基づく分析と理解が必要である。例えば、大学生の学力低下は多くの大学教員にとって共通の実感であるが、これを客観的に示す公開されたデータは必ずしも多くない。また、「ゆとり教育」のもたらす大学新入生全般の学力への影響や「コミュニケーションを重視した指導要領」による大学新入生の英語運用能力の変化についても、同じく共有可能なデータは十分とはいえない。

一例として、仮に大学進学までの英語学習に関して

以下のような疑問を感じたとして、担当教員の実感だけでなくある程度具体的な数字をもって答えることは容易ではない。

- 疑問詞で始まる疑問文を読み上げるとき、文末を rising intonation とする学生と falling intonation とする学生とでは、どちらがどれくらい多いのだろうか？
- allow の主母音を正しく /au/ と発音する学生と誤って /ou/ と発音する学生とでは、どちらがどれくらい多いのだろうか？
- 300,000,000 という数字を見てただちに正しく three hundred million とためらわずに読み上げることのできる学生はどれくらいの割合だろうか？

横森 大輔, 河村 まゆみ, 原田 康也, "L1 談話方略から見た日本人英語学習者の自発発話における母音延伸,"

日本英語教育学会第41回年次研究集会論文集, pp. 49-55,

日本英語教育学会編集委員会編集, 早稲田大学情報教育研究所発行, 2012年3月31日

This proceedings compilation published by the Institute for Digital Enhancement of Cognitive Development, Waseda University.

Copyright ©2011-12 by Daisuke Yokomori, Mayumi Kawamura, Yasunari Harada All rights reserved.

学習者の英語運用の状況を記録したデータとしては、『国際英語学習者コーパス』(ICLE) [16]など学習者の文章を集積した資料について、一定規模のデータの蓄積と公開が進められている。しかしながら、学習者の発話音声やその書き起こしを収録した資料は、規模の点でも多様性の点でも、十分なデータの蓄積・公開と研究利用がなされているとは言えないのが現状である<sup>1</sup>。その一つの背景として、英語教育の現場において学習者が産出する英語の中では、Word や PowerPoint 等のファイルとして作成された資料は電子的な蓄積と検索が容易であるが、学生相互のインタラクション・教員から学生へのその場限りの指示・教員と学生とのインタラクションなどは、これまで電子的な蓄積と検索になじまなかったという事情がある。

## 1.2. 早稲田応答練習コーパス

こうした状況を背景として、本稿第三著者(原田)を研究代表者とする一連の研究プロジェクトでは、原田が担当する早稲田大学法学部の英語授業における応答練習の場面を中心に、学生の比較的自発的な発話音声を収集し、その分析を行っている<sup>2</sup>。

この授業では、スピーキング・リスニング・ライティング・リーディングの統合的学習を目指し、英文エッセイライティングと有機的に関連付けられた形で、学生同士による応答練習を実施している。例えば、英語 Bridge (1年生向け春学期の授業)では、「3人1組の応答練習」・「応答練習の内容に基づくエッセイ作成」・「エッセイの相互レビューとリバイズ」というサイクルを、2週間を単位として行っている。また、英語 Gate (1年生向け秋学期の授業)では、応答練習の内容に基づいて PowerPoint で2,3枚のスライドを作成し、4名程度の少人数グループの中で相互に発表した後、エッセイ作成に移るといった段階が加わっている。

## 1.3. 応答練習の概要

一回の応答練習は次のような流れで行われる。まず、教員が事前に一つのテーマに関連する10の質問文を作成し、エーワンのマルチカードに一枚ずつ印刷して配布する。3人1組になった学生達は、カードの質問文を読み上げる「質問者」、読み上げられた質問にその場で答える「回答者」、回答の開始時間と終了時間を宣告し、同時にビデオカメラでの撮影も行う「タイムキーパー」という3つの役割に分かれ、それぞれの役割に従事する。質問と応答が終わるたびに相互評価用紙

に記入し、役割を入れ替えて次の質問文に移る。以上を一通り繰り返して、応答練習のセッションは終了となる。

質問者と回答者のやり取りにおいて行われている英語産出について具体的に示すものとして、実際の応答例を二つ引用する。

### 応答例 1

(質問文)

Do you think you are good in English? What are you doing to improve your English skills? Do you read English books or magazines? Do you think you will need to be able to speak English when you graduate and start to work in the real world?

(回答者の回答)

えっと、I'm not good at, in English. っと I, っと I'm, I don't read, English book, or magazines. えっと、えっと、I want to, be able to, speak English well.

### 応答例 2

(質問文)

Which is more important to you in your daily school life, getting good grades or having fun with your friends? Please explain why.

(回答者の回答)

O.K., そんなん決まってんじゃん, getting good grades だよ. なぜなら because, if I can't, get, good grades, I can't, graduate, from, graduate from, this school, this university.

ここに見られるように、回答者の産出する英語には、言い淀み、同じ表現の繰り返し、表現の言い直し、日本語の混在といった、日本人英語学習者による英語での自発発話に特徴的な現象が多く観察される<sup>3</sup>。

応答に際して、教員から学生に指示されているのは「英語で読み上げられた質問に対して45秒間で回答する」という事柄のみである。応答の中で日本語を使用することは明示的には禁止されておらず、また、英語で応答することすら明示的には指示されていない。したがってこの応答練習コーパスは、単に学生達の英語の習熟度を示すばかりでなく、<最小限の指示のもと、いかに学生達がマクロな活動・環境に対して適応しているか>を詳細に示すデータとしての一面を有している<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> 日本人英語学習者の発話を書き起こした資料としては NICT JLE コーパスがある。詳細については[1]を参照。

<sup>2</sup> 応答練習およびそのデータ収録とコーパス構築の詳細については[6]-[9]を参照。

<sup>3</sup> このような現象の多くは、本稿の4節でも論じるように、日本人による日本語での自発発話にも共通に見られる現象である。

<sup>4</sup> そもそも、ある言語の習熟度というものが、<マクロな活動・環境に適応する能力>と独立に測定できるものかどうか

## 1.4. データ蓄積と書き起こしの現状

応答練習のデータ収録は、2006年に開始し、2013年度末まで継続予定である。

毎回の授業（履修者数は30名前後）では、約10組による約30分間の応答練習を、1グループにつき1トラックを割り当てて音声収録を行う。音声は、各グループで使用されるマイクロフォンを、ケーブル経由でマイク8chフェーダ（2台）に接続し、増幅した音声をアレスシ製ハードディスクレコーダに収録している。これにより、同時に最大12トラックまで録音できる。また、音声に加えて、デジタルビデオカメラによる動画収録も行っている。これは前節に記したように、「タイムキーパー」役の学生によって撮影される。

以上のデータ収録体制により、一学期ごとにテラバイト単位の生データが蓄積され、順次書き起こしが行われている。

## 2. 句末の母音延伸 (PfvL) という現象

上記の学習者発話データにおいて、我々が「句末の母音延伸 (Phrase-final Vowel Lengthening; PfvL)」と呼ぶ現象が観察された。本節では、この現象の音声学的・音韻論的特徴を概観する。

### 2.1. PfvL とは何か

我々が PfvL と呼ぶ現象は、ある語において、語末の音素が母音である場合にはその母音が引き延ばされ、語末の音素が子音である場合には母音が添加されて引き延ばされる、というものである。例えば、以下はそれぞれ学習者データに観察された実例である。母音延伸の位置は下線と小文字の平仮名によって示されている。

- (1) There is うー mountain and おー sea.
- (2) ... but I いー think うー it is more important to have うー fun with friends.

PfvL が生じると、学習者の発話に対する母語話者による認識可能性を損ねると考えられる。例えば、語のレベルでは、PfvL が生じた語の本来の音節構造およびアクセントパターンからの逸脱が生じてしまう。また、句・節・文といった上位のレベルでも、本来のリズムやイントネーションのパターンが失われる。したがって、PfvL とは英語教育における課題の一つであると言える。

---

は自明ではない。この問題については本稿の射程を大きく超えるため、論点を指摘するに留めておく。

### 2.2. PfvL とは何でないか

なお、日本語を母語とする学習者の英語発話には、他にもこれに類する現象が見られることがある。本稿の考察範囲を明確にするためにも、類似現象について簡単に触れておく。

#### (A) 閉音節に対する母音挿入 (epenthesis)

例えば *bed* という語を /beddo/、あるいは *match* という語を /matchi/ と発音するといったように、閉音節に対する母音挿入 (epenthesis) の誤りが、日本人学習者の英語音声に頻繁に生じることが既に広く知られている<sup>5</sup>。これは、日本語には「ん」を例外として閉音節が存在しないため、本来は閉音節の箇所にも母音を挿入してしまう、という母語干渉の事例である<sup>6</sup>。この現象と PfvL は、同時に生じることがあるが、必ずしもそうと限ったことではない。興味深いことに、閉音節の発音そのものはある程度正しく習得している学習者についても、状況によって PfvL を生じることがある。

#### (B) 「英語的」な句末の母音延伸

英語母語話者の発話においても、言い淀み現象の一つとして、語末で母音延伸が観察されることがある。例えば Fox Tree & Clark [15] は、英語の母語話者の発話において、定冠詞 *the* の母音延伸が見られることを報告している。

- (3) “and when you come when you come to look at thiv. thuh literature, - I mean you know thuh actual statements” (Fox Tree & Clark 1997: 152)

したがって、たとえ学習者が語末で母音を延伸する場合でも、「日本語的に」伸ばす場合と「英語的に」伸ばす場合は、区別されるべきである。本稿で取り上げるのは前者のみであり、例え語末で母音が引き伸ばされていてもそれが「英語的」と判断される限り、生起頻度を数える上で後者は含んでいない。ただし、前者と後者の区別は現状では直感的な判断に頼っており、客観的基準の同定は今後の課題である。

---

<sup>5</sup> 例えば [11][12] を参照。

<sup>6</sup> 一つの可能性として想定されるのは、日本語の音節（モーラ）構造に影響されて、英語の音節構造を正しく習得・再生できないというものである。もう一つは、個別の語彙について、並行する借用語・外来語としての日本語語彙の発音が影響を与えることが考えられる。日本語・英語として基本的な語彙については、この両者の影響を分離して捉えることは難しいかもしれない。外来語としての日本語語彙として学生が通常使うことがないような単語について母音挿入が見られる場合には、音節構造の違いにその主要因を帰すことができるかもしれないが、両者の相互作用についての検討も求められるであろう。

(C) 語中の母音の延伸

学習者の発話には、語末だけでなく語中の母音を引き伸ばし、その結果やはり英語らしい発音を失っているものがある。

(4) I feel more confident tha あーn we えーn I did it

これは、PfVL と関連する現象であると思われるが、詳しい検討は今後の課題とする。

### 3. PfVL の生起傾向の調査

学習者発話データを観察すると、句末の母音延伸は決してランダムに生起しているわけではないことがわかる。本節では、学習者発話データにおける PfVL の生起状況についての調査結果を報告する。調査対象としたデータは、1.2 節で紹介した早稲田応答練習コーパスのうち、2007 年春学期のあるクラスの第一回授業で収録されたものである。

#### 3.1. 原稿読み上げ発話と自発的発話の比較

分析対象の発話データは、学生による応答練習における、質問発話と応答発話から構成される。両者を比較すると、質問発話が印刷された英文の読み上げであるのに対して、応答発話は比較的自発的な発話である、という特徴を持っている。PfVL の生起数を、質問発話と応答発話で比較した結果、以下の通りとなった。

発話タイプ	PfVL
原稿読み上げ発話（質問）	0 回
自発的発話（応答）	46 回

この表から見て取れるように、PfVL の生起数は自発的発話の方が圧倒的に多い。ただし、原稿読み上げ発話と自発的発話では、データに含まれる発話量が均等ではないため、それを正規化した上で PfVL の生起頻度を比較する必要がある。

発話タイプごとの発話量を、文・イントネーションユニット (IU)<sup>7</sup>・語という 3 つの水準から、比較すると次のようになる。

発話タイプ	文の数	IU の数	語の数
原稿読み上げ発話	358	767	3,483
自発的発話	206	316	658

<sup>7</sup> イントネーションユニット (IU) とは、韻律の点で「ひとまとまり」に発される発話音声のチャンクのことである。大まかに言って、一つの IU は複数の語から構成され、一つの文は複数の IU から構成される、という階層関係を想定することができる（ただしその例外も存在する）。IU に関する理論的および実践的な知見の詳細は[2]および[13]を参照。

いずれの水準においても原稿読み上げ発話の方が自発的発話よりも大きい値を示していることから、前者は後者よりもデータに含まれる発話量が多いと言える。すなわち、原稿読み上げ発話においては、発話量が相対的に多いにも関わらず句末の母音延伸が一回も観察されず、自発的発話においては発話量が相対的に少ないにも関わらず 46 回観察された、という明確な対照性を認めることができる。

#### 3.2. 文中の位置による比較

学習者の自発的発話の中で、特にどのような場合に句末の母音延伸が生じるだろうか。次頁の表は、末尾での母音延伸が生じる語の統語的地位の傾向を示したものである。

統語的地位	頻度	語彙（括弧内は頻度）
主語名詞	19 (41.3%)	I (19)
他動詞	10 (21.7%)	have (2), has, study, keep, like, try, think, work, read
接続詞	6 (13.0%)	and (5), because
be 動詞	5 (10.9%)	is (4), am
助動詞類	4 (8.7%)	will (2), has, not
その他	2 (4.3%)	of (a lot of の of), as (as for の as)

最も高い頻度で母音延伸が生じるのは主語名詞 (41.3%) であり、その全てのケースが一人称代名詞“I”である。次に頻度が高いのは他動詞 (21.7%) であり、be 動詞 (10.9%) と合わせれば、全体の 32.6% が動詞であることになる。また、全体の 8.7% を占める助動詞も、文中の位置の点でも文中の機能の点でも、これらと類似した性質を持っている。他には、接続詞における生起 (13.0%) も目に付く。今回のデータには、目的語名詞、自動詞、形容詞、副詞、冠詞といった品詞の語末における母音延伸は観察されなかった<sup>8</sup>。

### 4. 考察

本節では、幾つかの視点から、PfVL という現象をもたらす要因について考察する。

#### 4.1. 日本語における韻律現象

学習者の母語である日本語における言語行動には、母語干渉によって PfVL の源となった可能性のある韻

<sup>8</sup> PfVL の生起位置の談話的特徴については後述する。  
<sup>9</sup> このデータは PfVL が生起した場合の「内訳」を示すものであるが、各統語的地位の出現総数に対してどの程度の割合で PfVL が生起するかを示すことも重要であると考えられる。特定の統語的地位ごとに PfVL の生起しやすさに統計的有意差が見られれば、4.3 節の議論へのより有力なサポートとなるだろう。この点は今後の課題としたい。

律現象が存在する。

日本語の話し言葉では、文より小さい単位である「文節」の末尾において、母音に有標なプロミネンスと引き伸ばしが生じることがあることが指摘されている。以下は、定延[5]において報告されている実際の会話例である（下線は筆者）。

- (5) 男：仕事したあとにい  
女：うん  
男：5時からさあ  
女：うん  
男：10時まででえ

これは、文に満たないレベルの統語的境界において母音延伸が生じているという点で、学習者の英語発話における PfVL と類似しており、母語干渉の源となった現象である可能性がある。

日本語における句末の母音延伸は、話し手が、発話を構成するチャンクを少しずつ産出しなければならないとき（例えば<語り>や<説明>など、比較的長い発話を要するスピーチアクトを遂行するとき）に生じやすい現象である<sup>10</sup>。学習者発話における PfVL との関連で重要なことは、日本語発話における句末の母音延伸は、必ずしも「非流暢性」あるいは「言い淀み」と認識されるわけではない。むしろ、特定の談話文脈において、効果的な談話方略としてみなすことができる。

## 4.2. 自発発話に特有の現象としての PfVL

学習者データの検討の結果、発話タイプ間の相違に関する全体的傾向として、PfVL は原稿読み上げでは一度も起こらず、自発的発話においてのみ生じていた。

なお、この発話データを収集した応答練習課題では、学生は質問者役と応答者役を交互に担当するため、データには、同一の学習者による質問発話と応答発話が含まれている。この点と、上述の PfVL は原稿読み上げでは一度も起こらず、自発的発話においてのみ生じていたという事実を併せて考えると、各学習者の個人内にも、PfVL の生起状況に偏りが存在することが理解できる。すなわち、「原稿読み上げ時に PfVL を起こさない学習者であっても、自発的発話において PfVL を生じる」、そして「自発的発話において PfVL を生じる学習者も、原稿読み上げ時にはほとんど PfVL を生じない」、という非対称性が認められる。

以上のように、データの全体的傾向および個人内の傾向のいずれの点でも、PfVL が自発発話に特有の現象であることが示唆される。したがって、PfVL は、学習者のスピーキング行動として修正すべきものではある

<sup>10</sup> この現象に関する考察としては、[3][4][5][10]などを参照。

が、単に英語音の調音能力が未熟だったり、英語の音韻的知識が不足していたりするために生じているのではない。むしろ、自発発話に特有の要因が関わっている可能性が高い<sup>11</sup>。

原稿を読み上げるような場合と比較すると、自発発話の産出には以下のような特徴がある。まず、話し手は、発話の内容（何を言うか）と形式（どのように言うか）をオンラインで定式化(formulate)しなければならない (Levelt [18])。そして、発話の定式化と産出は、時間的制約の下でなされる（例、沈黙は避けるべきものとされる）ため、話し手はしばしば、十分に定式化をする前に発話の産出を開始する (Clark [14])。したがって、PfVL は、「その場で思考を整理しながら相手に対する応答行為を行う」という、認知的・社会的に複雑で高度なコミュニケーションスキルの問題として位置づけられるべきである。そして、そのような観点に立つことによって、観察された PfVL の生起傾向を説明するための手がかりが得られるだろう。

## 4.3. 生起傾向を解釈する

学習者発話データにおいて、PfVL が生起しやすい語の統語的地位は、主語名詞・他動詞・be 動詞・助動詞類・接続詞であった。逆にこの現象が観察されなかったのは、目的語名詞・自動詞・形容詞・副詞・冠詞といった地位の語である。この対照から、PfVL は「統語的に後続要素が義務的である箇所」に生起しやすい、という傾向を見出すことができる。

例えば、主語名詞は、述語動詞をはじめとする文中の他の要素が生起する直前の要素である。また、他動詞はその目的語が生起する直前の要素であり、be 動詞はその補語が生起する直前の要素である。接続詞はその後に節ないし文が、助動詞類はその後に述語動詞が、発話されるべきという統語的性格を有している。今回の分類では「その他」に含まれている”as for の as”に関しても、”as for”という複合表現の途中の位置であるという点で、これらと共通の性格を有している。

このような生起位置の傾向は、統語的な点で特徴的であるばかりではなく、談話構造上の点でも以下のような傾向を見出すことができる。つまり、PfVL を伴う発話チャンクは、アクセスあるいは定式化が容易な情報であることが多い。談話の中でアクセスあるいは定式化が容易な情報とは、トピック（特に、談話トピック）、旧情報、前提 (presupposition) といった性質を持

<sup>11</sup> この点についての傍証として、日本国内で働く複数の英語母語話者の観察として、プレゼンテーションで極端な癖のない英語でわかりやすい発表を行った日本人が、質疑応答になるとここで紹介するような PfVL を生じて、その英語の落差を不可思議に感じていたと述べていることを紹介したい。

った情報のことである<sup>12</sup>。その一方、PfVLの後に現れる発話チャックは、アクセスあるいは定式化に労力がかかる情報であることが多い。アクセスあるいは定式化に労力がかかる情報とは、フォーカス、新情報、断定(assertion)といった性質を持った情報のことである。

話し手は、自発発話の産出において、オンラインで定式化を行わねばならないため、しばしば十分な定式化をする前に発話産出を開始する。トピック・旧情報・前提といったタイプの情報は、アクセスあるいは定式化が相対的に容易なため、時間的制約の下でもスムーズに産出することができる。それに対し、発話の中のフォーカス・新情報・断定といったタイプの情報は、アクセスあるいは定式化が相対的に困難であり、実際にすぐにその部分が産出できない場合、話し手は2つの課題に直面する。それは、<定式化に必要な時間のため、スムーズな発話産出を一旦中断すること>と<発話産出の中断が「産出の終了」なのではなく、むしろこれから肝心の内容が伝達されるということ>を聞き手に示すことである。

このような課題への一つの対処法として、学習者の母語である日本語における談話方略を適用したものがPfVLであると考えられる。つまり、自発発話の産出の中で、発話の定式化になんらかの困難がある状況に直面したとき、まず定式化が容易な要素をPfVLを伴って産出し、PfVLを伴う語の統語的性質とも相まって、「これから肝心の内容が伝達される」ということをシグナルすることができる。

このような視点から捉え直してみると、一人称主語代名詞“I”でのPfVLの生起が全体の4割以上を占めている事実も理が適ったものに見える。というのも、このデータに収められている応答練習課題は、その質問の多くが、応答者のプロフィール・大学生活・個人的経験・意見に関するものである。したがって、“I”は、単に統語的に主語文の位置にあるだけでなく、談話上のトピックという特別な地位を占めていることが多い。すなわち話し手は、文の意味上の要点について思考を十分にめぐらす前に、「とりあえず」トピックである“I”を口に出した上で、残りの文の骨格について考える、という心理的プロセスを辿っていると考えられる。

## 5. 結語

### 5.1. まとめ

日本語を母語とする英語学習者は、しばしば発話途中の句末で母音を引き伸ばす、PfVLという現象を伴って発話を産出し、それによって発話の認識可能性が損

<sup>12</sup> トピック／フォーカス、旧情報／新情報、前提／断定といった概念の個々の性質と相互の関係については、[17]を参照。

われている。英語の発音に関して一定の習熟度を見せる学習者であっても、自発発話においてはPfVLを起こしてしまう。

学習者発話データを調査した結果、PfVLは統語構造上・談話構造上、特定の位置に生起する傾向にあることがわかった。この事実と、日本語の自発発話における、PfVLに類する談話方略の存在を併せて鑑みると、「学習者は、オンラインでの発話の定式化における困難に直面した時、日本語談話における方略を取り込み、それが結果としてPfVLになる」という仮説が導かれる。

### 5.2. 教育実践への含意

PfVLは、単に音声学・音韻論的な知識・技能の欠如だけに由来するものではなく、自発発話の産出における談話方略と関わっている。したがって、英語学習者に対して、英語の音声学・音韻論的な知識・技能を教えることは、発音指導として重要だが十分ではない。また、2.2節の(B)の項目で述べたように、英語母語話者達も自然発話の産出において様々な言い淀みを行っている。英語教育においては、語や文の理想的な音韻構造を指導するだけでなく、適切な音韻構造を損ねずにオンライン産出に対応するための技法やティップスとして、「英語母語話者のような言い淀み方」を指導する必要があるだろう<sup>13</sup>。

その一方で、PfVLが生じたのは、そもそも学習者における英語の音韻表象の習得が不十分であり、認知的負荷の高い状況に置かれたときに、その不十分さが「露呈」したために生じた、とも考えることができる。したがって、PfVLを防ぐためには学習者の音韻表象をより頑健なものとする必要があり、特に閉音節の構造やストレスアクセントの構造など、日本語と異なる英語の音韻的特徴を指導することも重要である。

### 5.3. 今後の課題

本稿では、2007年度春学期第1回収録時のデータに対して調査を行った。同じ調査を、同年度の秋学期最終回のデータに対して行い、一年間の応答練習を経て

<sup>13</sup> とはいえ、具体的にどのような指導方法が有効であるかは自明ではない。第三著者(原田)が担当する英語授業においては、eh, err, hmm, I mean, you knowなどの表現を紹介し、これらを利用する指導もある程度行っているが、学生達は自発的な発話に容易にこれらを取り込む行いうことができない。英語圏地域在住の経験があつてこれらの表現を用いていた学生が、授業が進むにつれて用いなくなるという例も観察される。こうした対話的な方略は周囲がそれを使わない環境では身につかないが、使う環境に入れば直ちに習得するという特徴があるように思われる。そうだとすると、日本人同士で英語を使用する環境で「英語母語話者のような言い淀み方」を『頑張る』習得することを目指すことにどれほどの意義があるのかは再考の余地がある。

消失する方向に向かうのか、あるいは逆に一種のピジン現象として強化されるのか、といった点を検討する必要がある。

また、PfVLは、言い淀み現象一般の中の一つであり、他にも繰り返す、つっかえ、フィラーなど、複数の言い淀みのパターンが存在する。これらと PfVL とを比較することも重要である。

さらに、これらの研究を通じた成果を統合して、学習者のスピーキング能力向上に役立つのに有効な指導法および教示法を開発することが望まれる。

なお、本稿で取り上げた「句末の母音延伸」という現象の存在に気づき、現象の性質についての理解や示唆が得られたことは、学習者発話データの収録と分析があつて初めて可能になったものである。学習者の比較的自発的な発話データの分析はこれまでほとんどなされていないため、今後新しい事実および英語教育上の課題が見出され、研究の俎上に乗せられていくことが期待される。

## 6. 謝辞

本稿の著者たちを中心とする共同研究は 2009 年度より科学研究費補助金基盤研究(B):課題番号 21320109 『属性付与英語学習者発話コーパスの拡充と分析: 大学新入生英語発話能力の経年変化調査』の助成を受けている。本稿で報告した発話音声収録装置の試作と試用にあたって早稲田大学特定課題研究助成費(一般助成)課題番号 2004A-033 『大学英語教育高度化のための外部試験を活用した学習者プロファイリングの研究』(研究代表者: 原田康也) ならびに課題番号 2005B-022 『英語教育高度化に向けた学習者プロファイリングとマルチモーダル学習者コーパスの研究』(研究代表者: 原田康也) による助成を受けている。本稿で報告したBluetooth・ワイヤレスマイクとデジタルビデオカメラの購入に当たっては科学研究費補助金(2006年4月-2009年3月)基盤研究(B):課題番号 18320093 『学習者プロファイリングに基づく日本人英語学習者音声コーパスの構築と分析』の助成を受けた。

## 文 献

- [1] 和泉絵美, 内元清貴, 井佐原均, “学習者コーパスからの表現バリエーションの抽出と言い換えストラテジー指導への利用,” 自然言語処理, Vol. 12, No. 4, pp. 193-210, 2005.
- [2] 岩崎勝一, “イントネーション単位,” 坊農真弓・高梨克也(編), 多人数インタラクションの分析手法, pp. 35-51, オーム社, 2008.
- [3] 小磯花絵, “『日本語話し言葉コーパス』を用いた対話と独話の比較—韻律的特徴に着目して,” 社会言語科学会第 17 回大会発表論文集, pp.190-193, 2006.
- [4] 定延利之, “文節と文のあいだ—末尾上げをめぐる一,” 音声文法研究会(編)文法と音声 V, くろしお出版, pp. 107-133, 2006.
- [5] 定延利之, “自然発話データに基づく日本語「戻し付きの末尾上げ」の観察,” (代読: 王軼群) 2007 北京中日教育文化国際フォーラム(北京外国語大学, 北京), 2007年9月22日.
- [6] 原田康也, “エーワンのマルチカードを用いた英語応答練習,” 情報処理学会研究報告 IPSJ SIG Technical Reports 2003-CE-69 (3), 学術刊行物 情処研報 Vol. 2003, pp. 17-22, 2003年.
- [7] 原田康也・辰己丈夫・前野譲二・楠元範明・鈴木陽一郎, “対面での応答を重視した英語学習活動と発話収録装置の試作と試用,” 情報処理学会研究報告 IPSJ SIG Technical Reports 2005-CE-80 (4), 学術刊行物 情処研報 Vol. 2005, pp. 25-32, 2005.
- [8] 原田康也・前坊香菜子・河村まゆみ・前野譲二・楠元範明・鈴木陽一郎・鈴木正紀, “VALIS: 学習者プロファイルに基づく学習者音声コーパス構築を目指して,” 情報処理学会研究報告 IPSJ SIG Technical Reports 2007-CE-88 (24), 学術刊行物 情処研報 Vol. 2007, No. 12, pp. 169-176, 2007.
- [9] 原田康也・前坊香菜子・河村まゆみ, “VALIS: 英語学習者発話データの書き起こし,” 情報処理学会研究報告 IPSJ SIG Technical Reports 2007-CE-90 (1), 学術刊行物 情処研報 Vol. 2007, No. 69, pp. 1-8, 2007.
- [10] 横森大輔・中川奈津子, “ケドの「文末用法」における二つのパターン—特にイントネーションと会話連鎖に注目して—,” 社会言語科学会第 21 回大会発表論文集, pp. 112-115, 2008.
- [11] Avery, P.; Ehrlich, S. *Teaching American English pronunciation*, Oxford: Oxford University Press, 1992.
- [12] Celce-Murcia, M.; Brinton, D. M.; Goodwin, J. M. *Teaching pronunciation: A reference for teachers of English to speakers of other languages*, Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- [13] Chafe, W. *Discourse, Consciousness, and Time*, Chicago/London: Cambridge University Press, 1994.
- [14] Clark, H. *Using Language*, Cambridge University Press, 1996.
- [15] Fox Tree, J. E.; H. Clark. "Pronouncing “the” as “thee” to signal problems in speaking,” *Cognition*, vol.62, pp. 151-167, 1997.
- [16] Granger, S.; Dagneaux, E.; Meunier, F; Paquot, M. *International Corpus of Learner English v2*, Louvain-la-Neuve, Presses universitaires de Louvain, 2009.
- [17] Lambrecht, K. *Information structure and sentence form: topic focus and the mental representation of discourse referents*, Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- [18] Levelt, W. J. M. *Speaking: from intention to articulation*, Cambridge: The MIT Press, 1989.